

アカデミア・シニカ

アカデミア・シニカは台北にある中国研究院の正式英名である。中国研究院は中華民国最高学術研究機関でありたくさんの研究部門がある。辛亥革命は1911年だが、アカデミアシニカの成立は1928年である。アカデミア・シニカを直訳すると、志那の大学（大学院・研究所）ということになる。誇りをもってこの名前がつけられたはずである。中国人も台湾人も志那に誇りを持っている。不思議なのは、志那は中国に対する別称だから使ってはいけないという人がいることである。誇りがなければ志那の大学という名前を付けるはずがない。中華民国や中華人民共和国の国名を中国と略称することがある。この場合は、現在の国名の意味だから、その意味で、例えば中国史などという、中華民国の場合は辛亥革命以後、中華人民共和国の場合1949年の中華人民共和国の成立以後のせいぜい100年の歴史の意味になる。これに対して、中国という言葉はもっと前から使われていたという人もいる。確かに、古くから中国や中華は使われていた。しかしこの場合の中国の意味は、中心となる国という意味である。中国に対しては、北夷、南夷のような、文化的政治的に劣った辺境の国が対峙される。そうした「差別的」意味を避けて、ユーラシア大陸の東南部に出現し攻防を繰り返した国々の歴史や文化を全体として表現する言葉としては、志那史とか志那文化しかありえない。蒋介石は、国共内戦のさなかに、志那の歴史・文化を集積した故宮博物館の宝物を必死に守って現在台北にある故宮博物館に持ってきた。彼が守りたかったのは志那の文化であり、志那の文化的な継承者としての中華民国であったろう。現在の台湾人や中国人が「志那」にどのような思いを寄せ、「志那」にどんな誇りを持っているのかは、私にはわからない。しかし、かつて、誇らしく「志那」といいアカデミア・シニカを名乗った人たちがいたことは確かだ。

さてここから政治的な話になるのだが、中華民国の英文名称は、Republic of China(ROC)であり、中華人民共和国の英文名称は People Republic of China である。中国(チョンコー)などと一言も言っていない。私はこれに屈折した醜い感情を感じてしまう。西欧を含む国際社会には、country of central などと言わずに「志那」といい。日本をはじめ周辺国には、「志那」と呼ばずに「中国」と言えという。この屈折した感情を同じアジア人として恥じ軽蔑するのは私だけではないだろう。さらに、私の周辺で「志那」は差別だから使ってはいけないと聞いた風なことをいう人を見ると、この醜さを感じる感性がないのかとあきれてしまう。台湾は「志那」の後継者であることを大きな声で世界に宣伝したらよいと思う。現在の中華人民共和国が、「志那」から中華人民共和国に至る歴史をどのように認識しているのかは知らない。歴史は連続している。「志那」は明らかに現在の中華人民共和国の文化・風習・政治に痕跡を残しているはずであり、その痕跡には誇るべき良いものもあるだろうし、否定したいものもあるだろう。歴史と向き合って、自分たちの内部にある「志那」を取り出してみなければ、今が一体何なのかもわからない。

「一つの中国」という国際社会を拘束しているわけのわからないドグマがある。現実に中

華民国（台湾）は存在し、民主的な選挙が行われ近代国家として機能している。このことを無視して「一つの中国」を不可侵の正義として奉ることは、国連における「アルバニア決議」の解釈論はさておき、理系人間の頭からすれば、滑稽でわけがわからずナンセンスである。一方で国際政治とはそういうものだという外交的納得のさせ方もあるのだろう。一つ提案がある。台湾が誇るべき「志那」の文化・歴史の正式な継承者は自分たちであると主張したらどうなるのだろうか。中華人民共和国は慌てて、自分たちを「志那」と呼んでくれというのだろうか。